

2023
Annual
Report
年次報告書

Voice of friends




FRIENDS
WITHOUT A BORDER

(認定)特定非営利活動法人
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
〒101-0031 東京都千代田区東神田1-14-11 ヤマダビル6F
TEL/FAX:03-6661-7558 friends@fwab.jp www.fwab.jp



Photo credit / Adri Berger , Yumiko Izu



ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）が開院して今年で9周年を迎えました。来年は区切りの10周年を迎えるにあたり、院内では、これまでを振り返り、今後を見据えた、今すべきことへ意識が向いているように感じます。ラオス人スタッフが徐々にリーダー職を担い始めていることはこれまでもお伝えしてきましたが、自らが病院の運営の責任を担う意識が日々高まっていることを実感した2023年でした。

LFHCの院内の活動は、開院後に外来診療のみから始め、入院、訪問看護、手術、救急、新生児室へ少しずつ拡張してきました。それぞれの活動は、9年を経て日々課題がありながらも安定した活動ができるようになってきたことが来院患者数の増加へつながっているものと思います。そして、2023年には新たに『予防プロジェクト』が開始しました。子どもの健やかな育成には妊娠から2歳のお誕生日までが重要であることに着目した、First 1000 days project という活動になります。ラオスの医療は中央（国立病院）―県（県立病院）―郡（郡立病院）―村（保健センター）という形で構成されていますが、今回の予防プロジェクトは、この村レベルへの

アプローチを行い医療の底上げを狙ったものとなります。（予防ページに詳細）

2014年にラオス政府と結ばれた覚え書きが更新の時期を迎えました。更新に当たっては、これまでの活動と今後を見据えた活動を行えるよう覚え書きを修正する必要があります。その作業をしながら10年前には想像していなかったほどの成長と開拓を達成することができたことを改めて認識することができました。

予想を超える発展を遂げるには、様々な紆余曲折を体験してきました。しかし、多くの皆さまからのご支援が私たちの支えとなり、今日を迎えることができました。自立までには、まだまだ少し時間がかかりますが、引き続き温かく見守っていただけますと幸いです。



フレンズ・ウィズアウト
・ア・ボーダー JAPAN
代表 赤尾和美

”国境なき友人たち“

支援者の皆さまへ

自由に世界を歩き来ることがこんなに素晴らしいとは！コロナ禍の数年を経て初めて気付かされたことは皆さまも同じ思いだと思います。

2023年は、フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーがラオスの保健局とラオ・フレンズ小児病院の建設と運営の10年契約が満期、再契約の年です。年の初めから契約内容の調整に多くの時間を使ってきました。ラオス人による自立運営が目標のフレンズにとって、運営に携わるラオス人幹部の養成が必須です。現在約190名のスタッフの中には優れた才能を持ったリーダー候補が見られ期待されています。

また可能な運営資金のラオス国内での調達は長期的な継続運営には必須と思われまます。この10年間は100%をフレンズが寄付金、助成金などで運営してきましたが、次の10年間の間にラオス政府からの部分的な金銭支援も要請する内容を盛り込んだ契約を合意し、たく政府と折衝しています。

単に建物を建設して、外国から機材や人材を入れて診療する病院ではなく、現地に根付いた運営と現地スタッフの育成、そしてある時点で全て現地スタッフが現地のリソースによって運営を末長く続けることができる、というのがまさにフレンズ式の支援です。

カンボジアにフレンズが24年前に設立したアンコール小児病院は現在では、病院長はじめすべての部長はカンボジア人、病院運営資金の3分の1はカンボジア国内収益で賄うようになり、今後その割合は増える見込みです。まだ9年生のラオ・フレンズ小児病院で嬉しい結果が出るのは次世代に期待するよう長い周期のプロジェクトですが、一歩一歩、着実に将来の子供たちの健康を願って私たちも頑張り続ける所存です。



フレンズ・ウィズアウト
・ア・ボーダー
創設者 井津建郎



私たちは「医療」「教育」「予防」を活動の柱としています



です。たとえば、病院の公用語を英語にすることで、世界中の指導者や書物から高度な技術を直接学んだり、自らが学会に参加したり、発信者となって世界に支援を呼びかけたりできるようにしています。

アンコール小児病院（AHC）はすでに現地化を達成しました。ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）もまた、現地化を視野に入れながら、経験豊富な外国人スタッフやボランティアが日々、現地スタッフの育成に力を注いでいます。

病院の現地化に向けて、私たちができること

私たちの目標は「現地の人の手で運営できる病院」です。いつまでも支援されるのではなく、自分たちで歩んでいく病院へ。そのためのスタッフ教育も、重要な取り組みの一つです。

私たちの活動は病院内にとどまりません。経過観察が必要な慢性疾病患者をフォローアップする訪問看護や、保健・衛生観念が浸透していない農村部に向いて病気の予防活動も行います。遠方の地域に赴くことで見えてくるもの、医療の必要性に気づいていない人に教育することで防げることがあるからです。

病院の外にも目を向ける、生活環境から考える医療

国際基準に見合った、質の高い病院を

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPANN は団体創設以来、医療を受けることが困難なアジアの子どものために活動しています。ラオスとカンボジアに非営利の小児病院を設立し、24時間体制で診療を実施。私たちの目指す小児病院は、「国際基準に見合った、質の高い、心のこもった医療を提供できる病院」です。

Compassionate care

～小さな命に寄り添う医療～

すべてのことに思いやりの心を持って対応すること
どんな患者さんも我が子と思うのと同じように接すること

それが私たちの考える Compassionate care です

子どもたちに対する医療行為においてのみならず
当団体に関わるすべての活動は
Compassionate care の信条に基づいて取り組まれています

ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）

2015年2月、ルアンパバーン県立病院敷地内に設立しました。現在、最も力を入れているのが、このプロジェクトです。ラオスでは肺炎や下痢、栄養失調等、予防や治療のできる病気で亡くなるケースが珍しくありません。子どもの病気がわかっていても、貧しさゆえに治療しない選択をする親もいます。国の脆弱なインフラと山岳地形も、医療へのアクセスの妨げに。また、既存の病院や保健センターは、医療設備の不



足や、医療従事者の医療倫理と技術の不足などにより、十分な医療を提供できるとは言えません。ラオスが抱える「使われない医療」使えない医療」という実情を、少しでも改善したいと願っています。

アンコール小児病院（AHC）

1999年2月、私たちの最初のプロジェクトとして、シエムリアップに設立しました。当初は私たちが運営を担っていましたが、目標を達成し、2013年1月に現地化。現在は「カンボジア人の、カンボジア人による、カンボジア人のための病院」として、私たちが育てたスタッ

フが主体となって舵取りを行っています。また、カンボジア国内の小児医療をリードする存在に成長し、国の医療行政に関わるほか、国内他病院の医療従事者、医療系学生や保健衛生に携わる人たちにも研修を提供。国全体の医療レベル向上に貢献しています。予防活動も、農村部や小学校に出向いての衛生教育を継続中です。

医療

コロナ禍を抜け、ラオ・フレンドズ小児病院（LFHC）では来院患者数が増え続けています。スタッフは懸命にケアにあたり、その甲斐あつて、以前にも増して院内に子どもたちの笑い声が響くようになりました。目の前の仕事や課題に向き合うことで忙殺されてしまいそうな日常ですが、そんな中でも、次に進むためのビジョンを描いています。「今」も大事だけれど、「未来」を見据えることも大事。LFHCがラオス国内における小児医療の中核的な存在となり、国内の医療レベルを底上げするという目標は、開院時から掲げているものです。次世代の子どもたちの健康を守るために、今やるべきことをコツコツこなし、将来へつなげるということを、スタッフ一人一人が胸に抱いています。

つの専門外来を設けました。腎疾患クリニック、整形外科クリニック、てんかんクリニックです。腎疾患クリニックでは、再発の早期発見や患者さんの病状管理が可能な環境を作りました。整形外科クリニックは、理学療法士によるリハビリと経過管理により、骨に損傷を負った患者さんの回復を助けることができます。てんかんクリニックでは、患者さんの治療と合わせ、アウトリーチチームが様々なフォローアップをするので、患者さん家族の負担を軽減。また、病気に對する周囲の偏見をなくすため、クリニックが包括的な支援と教育も行っています。また、県保健局と連携し、予防プロジェクトが開始されました。これは、幼児期の健康と栄養に焦点を当て、妊娠から2歳までの1000日間に着目するもの。この時期の健康と栄養を改善することが、その後の病氣予防につながるためです。3月から9月まで半年にわたる時間をかけ、2つの県の10の村で詳細なベースライン調査を行って問題を把握し、具体的な活動の指針を定めました。

こうした取り組みに加え、重要になるのがスタッフ自身の向上です。院内研修プログラムによるスキルアップは、常に継続されています。また、世界中からボランティアの専門家を招き、幅広い分野で知識や経験を学ぶ機会も設けました。そして、ここで得た知識を、LFHCスタッフが他病院や外部の医療従事者に向けて共有する場面も増えています。まさに国全体の底上げを目指すための活動です。外部からの研修依頼はLFHCに対する信頼や評判が高まっていることの裏付けでもあると、喜ばしく受け止めています。



外来病棟

現場では常にこれまでの経験や科学的根拠に基づいてケアを行い、品質監査ツールを用いてその評価を行っています。その継続によりLFHCのケアの品質が保たれ、さらなる進化を続けることができているのです。患者数の増加に伴い業務は慌ただしさを増しましたが、それでもケアの質を落とすことなく患者さんに向き合えた事実は、スタッフの自信にもつながりました。



入院病棟

入院病棟は現在、30床のベッドと、緊急用として廊下に設けている7床のベッドで対応しています。2023年は1日平均25〜30人の患者さんが入院し、ほぼ満床の状態が続きました。ピーク時は患者さんが45人にまで増



重症病棟（HAU）

2022年7月に開設されたHAUでは、スタッフ育成に力が入られました。これは、重症の患者さんを受け入れるにあたり、スタッフにもより高度なスキルが求められるようになったため。首都ビエンチャンでのICU研修や、海外専門医による教育プログラムの確立により、病棟スタッフは、挿管、人工呼吸器使用、血液ガス分析などの知識と技術を得ることができました。HAU教育プログラムができたことで、他部署スタッフに向けても同様の研修が実施されています。院内に高いスキルを持つスタッフが増え、スタッフの層が厚くなりました。

手術室

え、対応に苦慮する場面も。医師2人、看護師6人の病棟チームが、患者さんのケアの他、患者さん家族への教育、研修医や看護学生への指導なども担当しました。

入院時における患者さんへの投薬管理と安全処方に関しては、薬剤師も協力体制を取り、対応しています。

LFHCには専属の外科医がいません。しかし、隣接する県立病院のサポートで、整形外科、鼠径部、腹部を中心に989件の手術を行いました。また、海外から来院した外科チームにより、手術および指導のサポートがあつたことは大きなトピックです。スイスからは熱傷外科医と整形外科医のチームが来院し、手術だけでなく医師への指導・訓練も行ってくれました。

シンガポールの再建外科医チームは2度来院し、口唇裂、口蓋裂など、合わせて45人の子どもたちを手術。このサポート体制は、今後も継続される予定です。

いずれは外部サポートなしで手術対応できることが望ましく、将来に向け

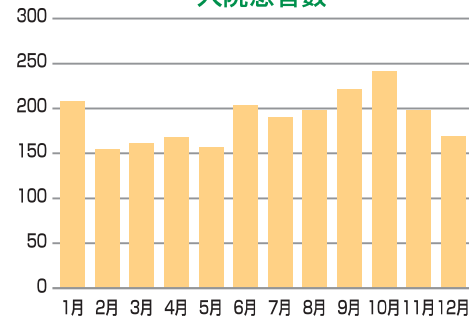
◎病院を訪れる患者さんは何人位いるの？

コロナによる規制がなくなったことで、全体的に患者数が増えています。時にはベッド数が不足するほどで、スタッフは対応に追われました。

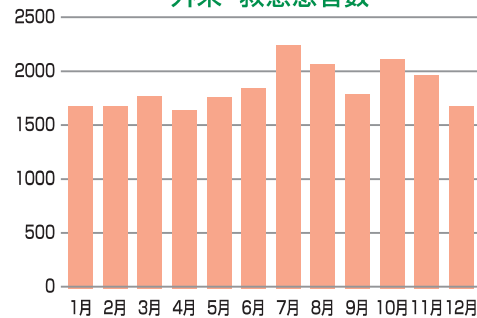
外来患者数	：20,603人
入院患者数	：2,278人
新生児患者数	：612人
救急患者数	：17,708人
手術件数	：1,008件

※のべ数

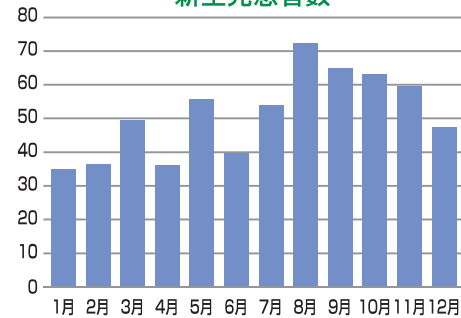
入院患者数



外来・救急患者数



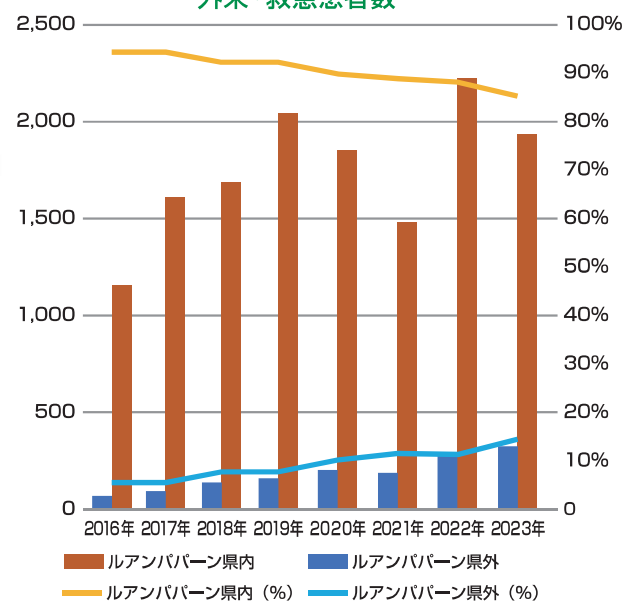
新生児患者数



◎ルアンパバーン県内・県外の患者数

県外からの患者さんは全体の約1割程度。しかし、少しずつではあるものの年々増加傾向にあります。LFHCの認知度や信頼度が高まるにつれ、遠方から搬送されるケースが増えました。

外来・救急患者数



数字で見るラオ・フレンズ小児病院（LFHC）

子どもたちに人気の病院マスコット
象のジャイディーが解説します。



新生児病棟

H A U開設以降、これまで救えなかった命をつなぐことができたケースが確実に増加しています。難しい状況を目の当たりにすることもあり病棟ですが、希望のある病棟であることもまちがいありません。

* H A U患者数 478人
* 人工呼吸器使用患者数 98人
* 経鼻ハイフロー療法 103人

救急病棟

救急病棟の患者数も大幅に増加。1万7000人を超える患者さんに対応しました。特に患者数が増えるのが週末で、多い時では70～120人に上ることも。大半を占めるのは気管支炎や肺炎など呼吸器系の疾患です。

病棟の性格上、迅速さを求められることが多く、難題にぶつかることも常ですが、スタッフは献身的かつ巧みに対応することができています。



検査科

検査件数も記録を更新。科内では必然的に、スタッフの協力関係が強固になりました。また、外部他病院での研修参加や、タイのマヒドン大学

医療技術学部との協力関係更新もあり、検査の正確性や信頼性が格段に上がっています。知識共有のため、4つの病院間でのネットワークキックも開始されました。

放射線科／画像診断部

最高品質のX線ポータブル装置2台を導入。これにより、鮮明でシャープなX線画像を得られるようになり、迅速で正確な診断が可能になりました。

大きな変化のひとつは、レントゲン室の模様替えです。レントゲン室に入ることで不安を抱える子どもも多くいるため、その不安を和らげようと実施。鮮やかな絵と光で、遊び心あふれた空間にしました。



発達・障がい児クリニック

新たな専門スタッフが加わり、よりきめ細かく患者さんに対応できるようになりました。また、同じような病気を持つ家族のつながりを促し、病気の子どもや家族が社会から孤立しないような環境づくりにも力を入れています。

日本から、アジア姿勢保持プロジェクト（ASAP）チームが来院してくれたことはとても大きなトビツクでした。一人で立ったり座ったりすることができない子どもたちのために、個々に合わせた特別な椅子や補助器具などを、低コストの資源を利用して作製してくれたのです。治療の上でも、気持ちの上でも、とても意味のあるサポートでした。



教育

LFHCにおける教育は活動の3本柱のひとつであり、とても大きな意味を持っています。院内スタッフのみならず、院外でも様々な医療教育を行って国の医療レベルを引き上げること。それが使命だと考えるからです。

院内では各種学習や研修が継続され、活気に満ちた教育環境が構築されています。研修プログラムはレベル別に分けられ、個人のレベルに合わせて受講。各人が確実にステップアップできるように組まれています。研修プログラムの開発も同時に行われているので、研修素材が常にアップデートされていることも特徴的です。

座学として知識を学ぶことはもちろんですが、医療現場では、そこで起こることすべてが実地訓練ともなるため、各病棟、各部署では常に、各々が指導およびスキルアップを意識しながら取り組んでいます。



医師教育

多面的なアプローチを意識した研修に取り組んでいます。若手医師向けには包括的な基礎コース、シニアドクターには2年間のカリキュラムを実施。国内外の学会へも積極的に参加し、最新知識の取得に取り組みました。

看護師教育

新人向けの基礎プログラムから経験豊富な上級者向けの高度トレーニングまで、レベルとニーズに合わせて実施されています。重症病棟（HAU）や新生児ケアのような専門分野に対応するための特別プログラムも開発され、認定スタッフを誕生させることができました。

非医療スタッフ

病院は医療スタッフだけでは成り立ちません。病院運営をスムーズに行うために、様々な非医療スタッフの力が必要です。LFHCでは、医療部門ではないスタッフの人材育成にも力を注いでいます。

中でも事務スタッフには多種多様なスキルが求められるため、研修内容も多岐に渡っています。管理職としてのスキル、リーダーシップの高め方、効果的なコミュニケーションの取り方、対立解決、業務評価の方法と開発、チーム力強化促進能力開発などなど。リーダーシップ研修、マネジメント研修と呼ばれていますが、一筋縄ではいかない研修プログラムです。

英語プログラム

全スタッフに対し英語教育が継続されていますが、2023年にはいくつかの変化がありました。2人の英語教師のうちの1人が健康上の理由で休職しなければならなくなったため、時間を再編成する必要に迫られたのです。教育部が開発



した新カリキュラムを用いて、臨床の場で英語クラスを行うことにもチャレンジ。これらは結果的に、クラスが追加されたり、出席率が上昇したりという好転につながりました。

これまでの英語教育といえば座学。それに加え新しいスタイルのプログラムができたことで、2022年の年間総受講数1958時間だったのが、2023年は10月までに3957時間にもおよびました。

院外の医療従事者への教育

インターン等の申し込みや、外部からの研修依頼が急増した1年でした。これは、LFHCのスタッフが教わる側だけでなく、教える側の立場になることも増えてきたということ。実力のあるスタッフが増えたという事実、外部からの信頼が厚くなったという事実は、とても誇らしいことです。

※看護学生および助産学生107人、医療助手学生88人、研修医およびインターン生11人を受け入れました。

※ルアンパバーン保健科学大学より講義依頼があり、学生への講義を行いました。

※新たに始まった予防プロジェクトの一環としてルアンパバーン県保健局とタッグを組み、郡立病院への研修プログラムを実施。地方への教育も始まりました。研修の評価や今後のサポートを見据え、リモートサポートに加え郡部へは複数回の訪問も行っています。郡立病院と合わせ村の保健センターにも研修とサポートを継続予定。国の医療の底上げを狙います。



予防

これまでの「予防」は「アウトリーチプログラム」が活動の主体でした。そこに新プロジェクトとして加わったのが、2023年3月にスタートした「予防プロジェクト」です。

『予防プロジェクト』の別名は「ファースト1000 days プロジェクト」。子どもの健やかな成育には妊娠期から2歳の誕生日までが重要である、ということに着目した取り組みです。1000日とはつまり、お母さんのお腹の中にいる期間プラス2年間のことを指します。この期間にきちんと栄養を摂るかどうかが、母親をはじめ家族が病氣予防の意識を持っていたかどうか、それがその後の子どもの健康状態を大きく左右するのです。子どもの成育にとって大事な期間に、地域ぐるみで予防教育を行えるようにと様々な計画が練られ、着手され始めました。『予防プロジェクト』はまた、国の医療を根底から底上げする一面も持ち合

せています。ラオスの医療は、中央（国立病院）―県（県立病院）―郡（郡立病院）―村（保健センター）という形態で構成されていますが、今回の「予防プロジェクト」は、村レベルのアプローチを行い、底辺の医療状況にテコ入れをする活動でもあるからです。

ルアンパバーン県には11の郡があります。その中の2つ、ナン郡とボンサイ郡を最初のターゲットエリアと定め、10月から各郡でのフィールドワークが始まりました。プロジェクトディレクター、LFHCの栄養士、ルアンパバーン県保健局からのスタッフがチームとなり、保健センターの医療スタッフと村のヘルスボランティア、村人を対象に、栄養や成長などについてワークショップを行っています。このプロジェクトはユニセフのサポートを受けており、ユニセフからの視察がありました。とても高い評価を受けることができました。まずは2年後を最初のゴールとしてプロジェクトの再評価を行い、次のステップへつなげて行く予定です。

『アウトリーチ』の活動は引き続き、院内にいる患者さんがスムーズに退院できるようサポートし、退院後も健やか

に過ごせるようなフォローアップを行っています。ここ数年、力を入れている、家族を含む緩和ケアと死後のケアを改善するためのサポートについては、個別の症例を通して、自分たちの役割や家族との関わりについて考える時間、学ぶ時間をより多く持つことができました。これは、アメリカの緩和ケア専門医とこまめに連絡を取り、細かなアドバイスを受けることができたため。その影響はとても大きく、リソースが限られた地域での痛みのコントロールについては、特に多くの学びを得ることができました。

今後はさらに、経験を通してケアのあり方や個別性について学び、自分たちで考えることが出来るよう、次のステップを目指していきます。

健康教育	： 1236件(前年比約2倍)
カウンセリング	： 801件(前年比2倍強)
経済状況アセスメント	： 324回(前年同様)
訪問看護開始前のアセスメント	： 133件(前年比1.5倍)
電話でのフォローアップ	： 966回(前年比1.5倍)



Aちゃんのケースから学ぶこと

Aちゃんはサラセミア（遺伝性血液疾患）で、定期的な輸血が必要でした。しかし、通院が難しい状況もあり、病状は思わしくありません。全身状態が悪化し、腫れた脾臓によりお腹は大きく膨れ、骨は折れやすく、肝臓や心臓の機能も低下。様々な対症療法を試したもののあまり効果はなく、緩和ケアの患者さんとして関わることになりました。

Aちゃんのご両親は毎日仕事で、Aちゃんは終日一人で留守番をします。自分の力で身動きが取れないAちゃんにとって、これはとても辛いことでした。「さて、そんなAちゃんを楽しい気持ちにするにはどうしよう？」緩和ケアとして何が出来るかをチームで話し合いました。

Aちゃんの家は比較的近い場所にあります。そこで、週に1回でも病院へ連れてきて、プレイルームで誰かと一緒に過ごす時間を作ってみようという決まりました。Aちゃんは想像以上に大喜びで、心配していたお母さんの顔にも安堵の表情が。しばらく続

けているうちに、時にはお母さんから「今日病院へ連れて行ってもいいですか？」とか、Aちゃん自ら「病院に行きたい。お迎えに来てください」と電話をもらうようになりました。そんな日々が1年ほど続いたある日、お母さんからAちゃんが自宅で亡くなったとの連絡が。2日前に病院へ来て、一緒にランチを食べて遊んだばかりです。これにはスタッフ一同、大きなショックを受けました。しかし、できる限りのことはできたという満足感は各自が抱けるように、チームでケースレビューを行いました。

スタッフの記憶に残っているのは、2日前のAちゃんのかわいい笑顔です。それはポジティブな記憶であり、自分たちを肯定的に評価し、今後のケアの在り方を前向きに考えるために重要なこと。決して辛いはかりではないはずで、こうした学びの経験が、関わったスタッフたちを成長させてくれると期待しています。

ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）だより

Phoumy医師が首都ビエンチャンでの小児専門研修医プログラムを修了しました

LFHCでは、スタッフ教育のための多様な機会が設けられています。たとえば医療スタッフの場合、日常的に継続される臨床トレーニングの他、国際学会や研究会に参加するなど学びの場を院内にとどめてはけません。医師のための「小児専門研修医プログラム」もそのひとつ。このプログラムは首都ビエンチャンで行われており、受講するための選考倍率が高い上、修了まで3年を要します。

LFHC開院初期から勤務しているPhoumy医師も受講のためしばらく病院を留守にしましたが、3年間のプログラムを修了しました。新しい知識を身につけてチームに共有することが子どもたちを救うことにつながるはず、との信念を持って受講を希望したそうです。これまでよりさらに専門的な知識と臨床経験を得たPhoumy医師。LFHCにとって、とても頼もしい存在です。



看護師のスキルアップのために研修が続いています

昨年オープンした重症病棟II HAUは一般病棟と集中治療室II ICUの中間に位置し、重症度の高い患者さんのケアや体調管理にきめ細かく対応する病棟です。そのため、HAUを担当するスタッフにはより専門的な知識や技術が求められます。

LFHCでは、HAUに対応できる看護師を養成するためのトレーニングプログラムを実施。人工呼吸器などの機器操作を含むトレーニングを終えた7人がHAU看護師として正式に認定され、新たにHAUチームに加わりました。開院して8年。LFHCに勤務するラオス人看護師の成長は目覚ましいものがあります。今では、新しく雇用された新人看護師への教育も、外国人スタッフのサポートなしで担えるようになりました。新人たちも、LFHCの医療レベルに適應できるよう、懸命に取り組んでいます。



ラオス北部における子どもたちの栄養状態調査が実施されました

LFHCの予防チームは、地域の保健衛生課とタッグを組み、子どもたちの栄養状態と現状把握のためのベースライン調査を実施しました。生後1000日の子どものがいる世帯266人へのインタビューに加え、地域の保健センター職員にもインタビュー。保健センターがうまく機能しているかどうか調査対象としました。

調査時期が雨季だったことや農作業が多忙な時期だったことで、未舗装の道を移動するのが困難だったり、インタビュー対象者と会えるのが夜間になってしまったりと、思った以上に難しい状況での調査となりました。しかし、この調査は、今後の活動指針を決める上でとても重要です。5歳未満の子どものがいる家族をつなぐ地域栄養協議会の設立や、地域栄養ボランティアの養成、妊婦健診の促進など、予防教育を行うための計画が一歩前進しました。



ラオス人リーダーを育成するための研修が盛んに行われています

LFHCは、近い将来ラオス人による病院運営が成されることを目標にしています。そのためには、医療スタッフ、非医療スタッフを問わず、自立できるだけの様々なスキルを身につけなければなりません。各自の職域における知識・技術スキルはもちろん、病院の理念であるコンパッション・ネットケアを理解することも重要です。開院から8年が過ぎ、LFHCのリーダー育成は、より活発になってきました。

実際、各部署にラオス人リーダーが誕生したり、病院運営チームにラオス人が加わったりしています。

医療部では、医療教育部長にAnnkham Thammaseang医師、医療部長にDorkeo Bounpaao医師が昇格。運営チームの一員になりました。

Annkham医師は、病棟で小児科医としての日常業務を行いながら、LFHCの臨床医に對するすべての医療教育と、院外医療従事者への外部トレーニングなど、医療教育に関わる分野を担っています。

Dorkeo医師は、LFHC医療部門全体の牽引役。ラオス国内の栄養失調に関するトレー

ニングも担当します。昨年、看護部長に昇格したMay Chittapai看護師と合わせ、これで3人のラオス人部長が誕生しました。しかもすべて女性。意図したわけではないものの、LFHCが掲げる男女平等を示した形にもなりました。また、院内ではリーダー育成プログラムが実施されており、十数名のグループに分けて受講を推進しています。これまですでに3グループがプログラムを修了しました。



Dorkeo 医師



Annkham 医師

IMAM（急性栄養不良統合マネジメント）に参加しました

2023年、LFHCは、ラオス保健省より、ラオス国内における「栄養不良管理および治療」を行う優れた機関であるとの認定を受けました。また、ラオス保健省とユニセフラオスによつて「栄養不良ガイドラインの実施機関」としても選定されています。ラオスでは子どもの栄養問題はとても深刻であり、栄養失調が重篤な病気を誘発するケースも少なくありません。LFHCが国から信頼され、期待されていることの表れだと受け止めています。

8月にビエンチャンで開催された全国IMAM（急性栄養不良統合マネジメント）、10月に開催されたIMAM関係者との調整会議に、LFHCからも栄養士マナージャーBounmark Phoumesyと教育コーディネーターDickya Labicaneが参加。国の栄養政策の草案について発表も行いました。国をあげての政策にLFHCが関わることを誇らしく思います。





カンボジア支援

【教育プロジェクト】

院内での各種教育は常時継続していますが、新型コロナウイルスのパンデミックが明け、国内多方面からの教育依頼が舞い込むようになりました。

これは、アンコール小児病院（AHC）が提供する小児医療トレーニングカリキュラムに対する需要が大きく回復したことを意味します。AHCの使命の一つは国全体の小児医療レベルの向上です。で、パンデミックの終焉を含め、とても喜ばしい傾向となりました。

AHCでは、多くの医療学生に小児医療研修を提供しています。看護師や助産師だけでなく、インターン、歯科看護師、理学療法士、ソーシャルワーカーなど、専門も様々。座学と臨床実習を両輪で提供する質の高い教育には定評があります。カンボジアの次世代を担う医療学生を広く受け入れることは、今後数十年にわたる命を救う活動が継続されるということです。

AHCが受け入れた学生の人数

- 医学生 71人
- 看護学生 454人
- 助産師学生 31人
- 理学療法士学生 17人
- 歯科看護学生 30人
- ソーシャルワーカー学生 2人

【地域保健医療プロジェクト】

プロジェクト

外来患者総数：102,224人
入院患者数：4,174人
集中治療室患者数：1,588人
外科手術件数(大小含む)：14,200件
新生児患者数：395人

※のべ数

パンデミック時には公衆衛生と感染予防対策に重きを置いていましたが、徐々に通常の活動が戻りつつあります。村や学校を直接訪問できる機会も増え、2024年には、新しい地区での新プロジェクトも動き出す予定です。

- 339人の小学生が歯科治療を受けました。
- 9,579人の小学生が公衆衛生について学びました。
- 30,278人の村人が、デング熱について学びました。



© Angkor Hospital for Children

- 3,115人の子どもたちに栄養不良の検査を実施しました。
- 農村部の小学校23校で、245人の教員に研修を行いました。
- 料理デモンストレーションを95回実施し、6,946人が参加しました。
- 414人の母親が、世界母乳育児週間に参加しました。
- 62人が女性問題会議に出席しました。
- 5つの健康センターでインフラ整備に着手しました。



ラオスを知ろう！



ユニセフ「世界子供白書2023」より抜粋

	日本	ラオス	カンボジア
新生児死亡率	1人	21人	13人
5歳未満児死亡率	2人	43人	25人
妊産婦死亡率	4人	132人	218人
平均寿命	85歳	68歳	70歳
家庭で衛生的な飲用水源を利用している割合	99%	85%	71%
家庭で適切なトイレ設備を利用している割合	100%	79%	69%

※新生児および5歳未満児の死亡率は、出生数1,000人あたりの死亡数。

※妊産婦死亡率は、出生10万人あたりの死亡数で、

当該時期に妊娠関連の原因により死亡した事例が対象。

首都：ビエンチャン
面積：日本の約3分の2
地形：国土の約80%が山岳地帯で海のない内陸国
人口：744,3万人（2022年、ラオス統計局）
民族：ラオ族ほか50民族からなる多民族国家
気候：熱帯モンスーン気候（雨季5～10月、乾季11～4月）
政治体制：一党支配体制の社会主義国

農産物編 「ラオスコヒーの話し」

ラオ・フレレンズ小児病院（LFHC）で勤務する赤尾が帰国する際はいつも、「コヒー欲しい人？」とか「オフィスにコヒーはまだある？」といった声がけをしてくれます。コヒーの産地といえは南米やアフリカを思い浮かべる方が多いかもしれませんが、実はラオスでもコヒーの栽培は盛んで、コヒーはラオス土産の定番でもあるのです。

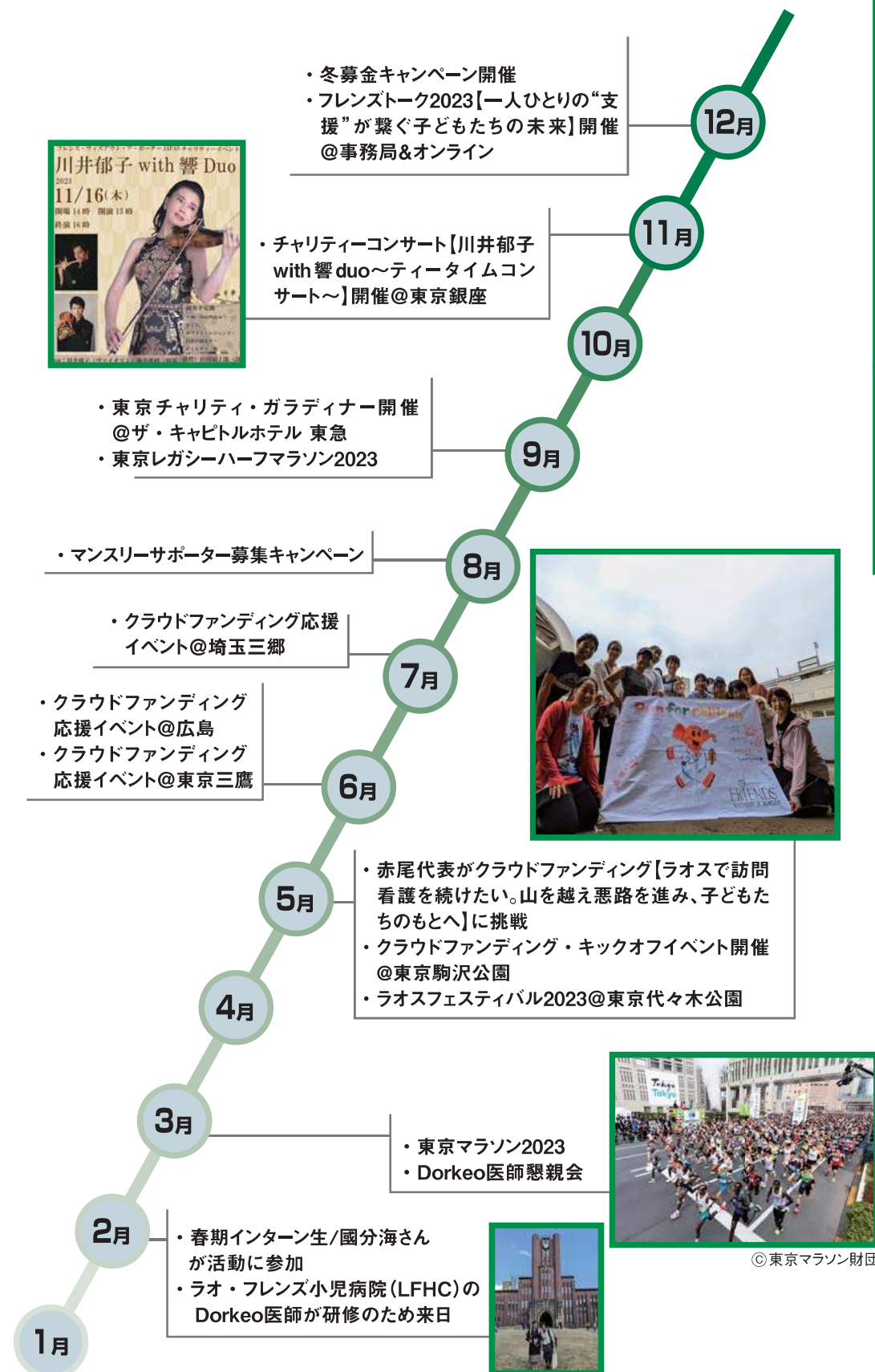
というのも、コヒーの産地は、赤道を中心とした北回歸線（北緯25度）と南回歸線（南緯25度）の間にある国々に集中しているため。別名「コヒーベルト」と称されるほどで、この地帯の気象条件や土質がコヒー栽培に適していると言われています。ラオスが位置しているのは、まさにこの「コヒーベルト」地帯。ラオスコヒーは、甘みを感じさせる豊かな香りと、苦味と酸味の柔らかさが特徴とされています。フレレンズ事務局のコヒータイム



は、ラオス産コヒーのチョコやキャラメルを思わせる香ばしい香りで満たされ、しばしうっとり。最近、LFHCのあるルアンパバーン県では、国連WFPと日本企業の（株）坂ノ途中さんらで取り組むコヒー栽培による生産者支援も始まっています。コヒー栽培を促進させることで、そこに携わる地域住民の暮らしや栄養状態を向上させようというプロジェクトです。コヒー栽培が人々に安定的な収入をもたらせば、生活の質や食生活が改善できるはず。また、木々を伐採せずに森の中で育てる農法を用いることで、森林保全にもつながるそうです。

ラオスコヒーは、各種通販で入手できます。ぜひお試しあれ。

コロナウイルスによるパンデミックから少しずつ抜け出し、オンラインだけでなく、対面によるイベントなども行えるようになりました。まだマスク装着が必要ではありませんでしたが、以前よりだいぶアクティブになったのではないかと思います。



東京マラソン&東京レガシーハーフマラソン

日本最大の大都市マラソンである東京マラソン、オリンピック東京2020をきっかけとして誕生し国立競技場をスタート&フィニッシュ地点とする東京レガシーハーフマラソン、どちらも一般財団法人東京マラソン財団が主催する国際的なマラソン大会です。これらの大会にはそれぞれチャリティ枠が設けられており、その寄付先団体のひとつに当団体も参加しています。チャリティ枠で出走権を得たチャリティランナーは、“走れる幸せを誰かの幸せにつなげよう”との願いを込め、応援する団体 pensando 走ってくれるのです。世界中から集まった当団体のチャリティランナーさんたちも、「ラオスの子どもたちのために」「ランforチルドレン」といった思いを胸に激走してくれました。大会前に催されるEXPOのブースや、マラソン後に立ち寄れる団体特設の個別ラウンジで、チャリティランナーさんたちと交流できたのは嬉しかったです。当団体とラオ・フレンズ小児病院 (LFHC) に心を寄せてくれていることを知り、あたたかい気持ちになりました。

LFHCのDorkeo医師来日歓迎会

2月、LFHCからDorkeo医師が来日しました。東京大学で開催されたシンポジウムへの参加と、都立小児総合医療センターで超音波研修を受けることが目的です。滞在中は、当団体創設期からご支援をいただいている、加藤昇さん美里さんご夫妻のお宅にホームステイ。加藤さんのご厚意で、Dorkeo医師の歓迎すき焼きパーティーも開催していただきました。ランチの後は東京タワー観光へ。Dorkeo医師を囲んで楽しいひと時を過ごしました。Dorkeo医師は今回の日本での研修のほか、ビエンチャンでの専門医研修も修了。今年、LFHCの医療部長にも就任しました。今後のますますの活躍を期待したいです。



イベントピックアップ

東京チャリティ・ガラディナー

当団体主催の大きなイベントである東京チャリティ・ガラディナーを、4年ぶりに開催することができました。ガライベントは、ワインとコースディナー、エンターテインメントを楽しみながら、チャリティオークション等を通して活動を支援していただく、パーティー仕様の催しです。今回は、中国や香港、アメリカからお越しいただいた方も合わせ158名様にご参加いただきました。途中、LFHCとオンラインで繋ぎ、現地からThomas院長が挨拶。日頃の感謝を、現地の生の声として伝えることもできました。



ラオスフェスティバル2023

コロナ禍で中止されていたラオスフェスティバルが、ついに復活！対面の大きなイベントが再び開催されたことは、それだけで感慨深いものがありました。5月とはいえ気温がぐんぐん上がる中、たくさんの方がブースに立ち寄ってくださり、とてもありがたかったです。ラオスに旅行に行くという学生さん、ラオス関連の企業の方、医療関係の方、散歩途中で立ち寄った方などなど、様々なバックグラウンドを持つ大勢の方とお話し、当団体の活動をアピールすることができました。



こんな支援方法もあります

●本やCD/DVDを「ありがとうブック」に送付

家で眠っている本やCD、DVD、ゲームソフトを合わせて30点以上、宅急便で「ありがとうブック」に送ると、その買取代金が当団体に寄付されます。新品・中古は問いません。部屋を片付けて寄付につなげましょう。

問い合わせ先：ありがとうブック

<https://www.39book.jp/supporter/2095/>

●健康ドリンクを購入

「お〜いお茶」などで知られる飲料水メーカー

(株)伊藤園様とのタイアップ企画を行っています。

「伊藤園 健康体 契約企業専用サイト」

<https://www.kenkotai.jp/shop/a/abbcT044/>

このサイトでは優待価格で商品を購入でき、また、その売上の7%が当団体に寄付されます。「伊藤園 健康体」は、毎日の健康を積み重ねる良きパートナーとして、健康飲料や健康食品、サプリメントなどを扱っているオンラインショップです。健康増進を図ることが支援につながりますので、ぜひご利用ください。



●イベントを開催

当団体を支援するチャリティイベントの企画・開催を歓迎します。たとえば、ご友人とのランチ会やゴルフコンペの会費に支援金を上乗せする、学園祭やサークルのイベントで募金箱を置く、自分たちでチャリティライブを行うなど。団体紹介の資料等が必要な場合は、お気軽にご相談ください。

●ブランド品を「Brand Pledge」に送付

着なくなった洋服やブランド品をダンボールに詰めて「Brand Pledge」に送ると、査定金額に500円を上乗せした金額がフレンズに寄付されます。

クローゼットの中に身に付けなくなったブランド品は眠っていませんか？もう出番はなさそうだけ捨てるには惜しい……と思ったらぜひ、そのブランド品を子どもたちへの支援にあててください。洋服やバッグ、アクセサリーだけでなく、スカーフ、ハンカチ、タオルなども対象となります。買取金額に対しては税制の優遇措置が可能な領収証を発行します。

問い合わせ先：

Brand Pledge <https://brand-pledge.jp>

●グラフィックデザインなどの技能や専門知識を提供

チラシやDMのデザインを担当してくださるボランティアを募集しています。他にも、専門的な技能や知識を活かしたボランティアをしてみたい方、どんどんお声がけください。

●携帯料金とまとめて寄付

ソフトバンクのスマートフォン利用者は「つながる募金」を通じ、携帯料金と一緒に寄付ができます。100円からの毎月継続寄付、1回限定の寄付を選択可能。寄付金控除の領収証も発行します。

●遺産・香典を寄付

故人の遺志を、アジアの子どもたちのために役立てていただくことができます。活動地やプロジェクトを指定することも可能。必要な手続きを行うと、税制の優遇措置を受けることができます。

皆さまの支援でこんなことができます (1人分の目安)

500円	薬代(平均額)	5,000円	蘇生器具を必要とする新生児治療代
1,000円	検査代(平均額)	10,000円	小手術代
3,000円	外来診察代(薬代含む)	30,000円	入院代(1日分の平均額)

※1ドル=150円の場合

How to Support 支援方法について

私たちの活動は、皆さまのご支援により支えられています。

支援方法をお選びいただけます

●正会員

年会費 個人12,000円

団体・法人30,000円

(年度ごとに更新・議決権あり・入会申込書あり)

●賛助会員

年会費6,000円(支払月より1年間)

●学生賛助会員

年会費3,000円(支払月より1年間)

●マンスリーサポーター

月500円～自由に金額指定

(クレジットカードまたは指定口座より引き落とし)

●一般寄付

金額・回数自由

※ご寄付には税制の優遇措置が可能な領収証を発行します。

※PDFでの領収証発行にも対応しています。

ご希望の方はお申し付けください。

※銀行振込や、インターネットからのカード決済も可能です。

※寄付金の10%は現地の活動を支えるための管理費として活用させていただきます。

マンスリーサポーターって何？

マンスリーサポーターになると、決まった金額が毎月、ご指定の口座から自動的に引き落とされます。「継続的に支援したい」「小さな金額で無理なくコツコツと支援したい」「年会費の振り込みを忘れがち」といった支援者さんからの声にお応えして誕生しました。500円からの支援プランがあり、好きなプランをお選びいただくことができます。

<お申し込み方法>

■クレジットカード決済をご希望の方

右のQRコードもしくは以下にアクセス

<https://congrant.com/project/fwab/1658/form/step1>

■口座振替をご希望の方

フレンズ事務局までお問い合わせください。



2023年 活動計算書

2023年1月1日～2023年12月31日
特定非営利活動法人 フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー-JAPAN
(単位:円)

科 目	金 額
I 経常収益	
1 受取会費	552,000
2 受取寄付金	158,820,705
3 事業収益	6,252,265
4 その他収益	283
経常収益計	165,625,253
II 経常費用	
1 事業費	
人件費	7,361,328
その他経費 支払寄付金	132,066,937
その他	16,377,112
事業費計	155,805,377
2 管理費	
人件費	2,322,194
その他経費	3,158,812
管理費計	155,805,377
経常収益計	161,286,383
税引前当期正味財産増減額	4,338,870
法人税、住民税及び事業税	70,000
当期正味財産増減額	4,268,870
前期繰越正味財産額	22,190,910
次期繰越正味財産額	26,459,780

東京チャリティ・ガラディナー2023スポンサー



2023年度役員

代 表
赤尾 和美(看護師)

副代表
井津 建郎(写真家)

理事
戴 波留美
高橋 大輔
(三光ソフランホールディングス(株)専務取締役
メディカルホットライン(株)代表取締役
(医)誠光会 ひかりクリニック 理事
(福)誠高会 さくらんぼ保育園 理事)
中小路 太志
松島 彰雄(前代表)
山下 徹真
(宗)中山身語正宗 責任役員、妙光山常行寺住職)
渡辺 淳子
監事
熊井 昌広

2023年度正会員

和泉 直子
一乗 朋美
大角 雄三
大松 誠二
(株)岡興産
小川 直美
小澤 誠
加藤 嘉哉
兼子 思
熊井 貴美
熊井 昌広
(株)熊谷組
小山 達雄
Sisyphus(株)
(医)誠光会 ひかりクリニック
関岡 俊二
(宗)泰宗寺
高橋 俊晴
(株)ナース・ステーション
猶原 祥光
(医)中野こどもクリニック
中山身語正宗 関東別院誓照寺
則包 哲
橋本 朋子
平岩 町子
藤井 哲夫
松原 めぐみ
真弓 バラカン
水谷 祐子
メディカルホットライン(株)
(医)めときこどもクリニック

【ありがとうブック】を活用しよう!

【ありがとうブック】では、日本全国から届いた寄付品をお金に換えて、その売買金額を寄付者が希望する団体に届ける活動をしています。寄付品となるのは、もう読まない本、聞かなくなったCDやレコード、見ることがないDVD、遊ばなくなったゲームやおもちゃ、使わない家電、身につけなくなった洋服やファッション小物などなど、つまりは家のどこかで眠っている品々です。そのまま眠らせておくか、はたまたゴミとして処分するか、そんな自分にとっての“不用品”が、世界のどこかで支援を必要としている誰かのためになるなんて、とても夢のあるお話だと思いませんか。

これは【ありがとうブック】を運営する株式会社ホンカウ様が、古本買取事業をなさっていることで実現できている支援サービスです。2017年1月にスタートした【ありがとうブック】には、これまでのべ9,600人以上から総アイテム数55万点以上の寄付品があり、総額3,340万円にもおよぶ支援金に換えることができました。

品物を寄付する方は、支援先を指定することができます。【ありがとうブック】が選んだ支援先として当団体も加えていただいており、品物を送る際に「フレンズを応援したい!」として申請していただければ、その売買金額がそのまま、フレンズへの支援金となるわけです。

寄付の手続きはとても簡単なので、まずは【ありがとうブック】のサイトをチェック!

<https://www.39book.jp/supporter/2095/>

お電話でのお問い合わせは0120-29-3929 (受付時間10～18時)



【寄付型飲料自販機】を広めよう!

自販機の売り上げの一部が寄付先団体に寄付される【寄付型飲料自販機】の設置を進めています。

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー-JAPANのオリジナル自販機に出会ったことはありませんか?その【寄付型飲料自販機】でドリンクを買うと、代金の一部が自動的に団体への寄付になります。これは(株)伊藤園様とコカ・コーラ ボトラーズジャパン(株)様が社会貢献活動として取り組んでくださっているもので、自販機利用者は気軽に支援ができますし、もしかしたら、知らず識らず支援していたというケースもあるかもしれません。

日本全国の様々な場所に私たちの【寄付型飲料自販機】が広がれば、寄付が集まるだけでなく、団体の活動を知ってくれる方も増えるはず。学校、職場、パーキングなどなど、【寄付型飲料自販機】を設置してくれる会社やお店を募集しています。もちろん、個人で設置いただくことも可能です。設置に関する詳細は、お気軽に事務局までお問い合わせください。

● お問い合わせ先：フレンズ事務局 friends@fwab.jp

